

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ホワイトヘッドにおける直接知覚と表象

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2020-03-19 キーワード (Ja): ホワイトヘッド, 直接知覚, 表象, 選言主義, 生態学的知覚論 キーワード (En): 作成者: 平田, 一郎 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00007911

ホワイトヘッドにおける直接知覚と表象

平 田 一 郎

要 旨

近年の知覚論において、生態学的知覚論や選言主義の立場から直接知覚が問題となっている。それは表象などを介することで外界との接触が薄れることを批判するものであり、むしろ知覚の対象が外界の対象そのものであることを確保しようとする。

これに対するホワイトヘッドの立場は複雑である。選言主義が批判する錯覚論法をむしろ強化した形で取り入れつつ、直接知覚については因果的効果という形で確保しようとする。他方現前的直接態という形で先の強化された錯覚論法を使いつつ表象による知覚を主張する。この両者の異なったタイプの知覚は象徴的指示という形で繋がる。

ホワイトヘッドがこうにしたのは、直接知覚による外界とのつながりを確保しつつ、表象の操作性を保持しようとしたからであろう。そういった包括性にホワイトヘッドのコスモロジーの意義がある。

キーワード：ホワイトヘッド、直接知覚、表象、選言主義、生態学的知覚論

はじめに

従来の知覚論においては、知覚されたものは心の中の何らかの心的対象を通じて知覚される、という考え方が一般的であった。即ち外的対象は直接知覚されるのではないのであり、一方直接知覚される心的対象は、外物を表象する限りで「表象 (representation)」と称される。それは知覚が心の活動である一方、外的対象は物理的なものであるがゆえに、両者に間隙を見出したからでもあった。

このような「間接知覚」(indirect perception)は、生理学的な知覚像にも一致する。即ち物理的対象である外物の知覚においては、その外物が発する何らかの物理的刺激(例えば視覚であれば光の刺激)が感覚器官に達し、さらにその物理的刺激による情報が感覚器官から神経系によって脳に伝達され、脳内の何らかの電磁的な生起を引き起こす。知覚とは実はこういった脳内の何らかの電磁的生起に他ならない、とする¹⁾。

これに対して近年直接知覚(direct perception)が主張されるようになった。即ちわれわれが直接知覚するのは心の中の表象ではない、むしろ外物を直接知覚するのだ、というのである。

あるいはむしろわれわれが知覚しているものが外物だということになる。そしてこの考え方は同時に内的対象としての表象批判にもつながる。

こういった近年の知覚論の研究に対して、「経験一元論」ともいうべきホワイトヘッドのコスモロジーはどのように位置づけられるのか、そしてそれが現代の議論にも何らかの寄与をなす可能性はあるのか、本稿ではそういった問題を考えてみたい。

1. 直接知覚論とホワイトヘッド

1-1. 生態学的知覚論 (theory of ecological perception) と選言主義 (disjunctivism)

そういった直接知覚を主張する考え方の一つが、J.J. ギブソンによる生態学的知覚論である²⁾。

ギブソンは原子や電子などの科学的対象の実在性を認めた上で、より日常的で巨視的な対象が客観的に実在すると主張する。動物や事物がその中を移動できる密度の薄い媒質 (medium)、日常的な大きさの何らかの「モノ」としての物質 (substance)、そして物質と媒質を分離する境界面としての面 (surface) といったものである。例えば陸上動物は、大気という媒質の中を、大地という物質と大気を分かち面の上を移動し、草や肉といった物質を食する。

そしてそういった媒質の中に情報が存在する。その情報を動物が取り入れることこそ、知覚することなのである。例えば視覚においては大気という媒質が光によって満たされている時、その光の中に例えば机についての情報が存在する。光の机による反射は光源から机に至って目に届くという一方向だけのものではない。むしろさまざまな方向からの乱反射が重なりながらある構造を持った配列の光の束が生じ、知覚者はそういった光の束に360度包囲されている。そういった包囲光における構造、コントラストの構造の中に例えば机の視覚情報が含まれており、それは心が構成したものではなく客観的に存在する。

こういった客観的情報は何かについての情報として、何か、例えば机を特定する。それは環境内の対象物、例えば机に法則的に対応している。知覚においては、環境に客観的に存在する知覚物についての情報を直接知覚する。

さらに選言主義の主張も、間接知覚の批判と密接に結びついている³⁾。選言主義とはまさに間接知覚、特にセンス・データ (sense data) 理論の根拠となる錯覚論法 (argument from illusion) への批判から成立する。

例えば茶色い机をそのまま知覚している時と、光線の具合で茶色が黒く見える時に茶色い机を黒い机と錯覚して知覚する場合を考えよう。どちらも「茶色い机を知覚する」「黒い机を知覚する」ということであり、知覚への現れだけでは、一方は真正な知覚 (veridical perception)、他方は錯覚であるということの区別はつかない。むしろわれわれは同じように「茶色い机の像」「黒い机の像」を知覚していて、ただ「茶色い机の像」は外物と対応しているが、「黒い机の像」

は外物と異なっているというだけである。このように真正な知覚の場合も錯覚の場合にも共通する「何か」を直接知覚するが、それは外物そのものではない。そういった直接知覚する「何か」をセンス・データ（感覚与件）とするなら、外物はセンス・データを通して間接的に知覚しているだけとなる。さらにこのセンス・データは心の直接的対象である限り、心の内の何らかの心的な対象であって、外界の物理的対象と一線を画することになる。

選言主義はこういった真正な知覚と錯覚、さらに薬物などの影響で外界に存在しないピンクの像を見てしまうといった幻覚がわれわれに直接的には同等であるということを否定する。むしろわれわれは知覚においては真正な知覚を持つか、「または」錯覚を持つか、幻覚を持つかのどちらかである、ということを強調する。即ち真正な知覚と錯覚、幻覚は全く別のものでわれわれはどちらかを知覚するとき、他方とは全く別のものとして知覚しているとする。

もっともそういった真正な知覚と、錯覚、幻覚との区別をわれわれが現象的なレベル、即ち外物のわれわれへの現れだけでできるのかどうかについては種々の議論がある。しかしこういった選言主義の主張の根底には、われわれは外界をセンス・データなどを通して間接的にではなく、直接知覚しているのでなければならない、という考えがあるのは明らかであろう。即ち選言主義は直接知覚を主張する。

そして外界を直接知覚するのであれば、われわれの知覚における外界の像と現実の外物の関係が問題となる。実際選言主義は、素朴实在論 (naïve realism) を主張する。それは「心から独立した対象があり、われわれの知覚はその対象についてのものである」ということである。ただしここで選言主義はこの「心から独立した対象」がわれわれの知覚する通りのままのものであるという、例えば机を知覚する時、その机がわれわれの知覚するままであって、ある大きさをもった茶色の均質な物質云々という主張まではしない。むしろそういった机が実際は原子や分子などからなっていて、われわれが知覚するのと異なるという可能性を残している。

その点で選言主義は生態学的知覚論とは異なる。生態学的知覚論は原子や分子といった科学的対象と、茶色く四角い均質な物質として机の双方を認め、それらが入れ子状 (nesting) に、例えば机の中に原子分子が共に存在するということを主張する。しかし選言主義はそういった世界の在り方については沈黙して、ただ原子や分子など科学的实在のみが存在するという可能性を残した主張をしているのである。

1-2. ホワイトヘッドと錯覚論法

それではこういった直接知覚論とホワイトヘッドの知覚論とはどのような関係であろうか。ホワイトヘッドの知覚論と生態学的知覚論の比較については別の論考ですでになした⁴⁾。そこでは両者が直接知覚という点では共通しているということ、ただし表象を認めているという点で、ホワイトヘッドが生態学的知覚論では説明できないことを補完していると論じた。

しかし選言主義の錯覚論法といった観点を取るとホワイトヘッドの知覚論の別の側面が見えてくる。われわれが何らかの知覚をする時、真正な知覚「または」錯覚、幻覚をなしているという選言主義の主張は、先に述べたように両者が全く別のものであるという主張になる。

ホワイトヘッドの場合、錯覚論法は、幻覚も含めて「妄想」(delusion)を巡る議論とされる。

しかしそれでもここで「妄想性」のさまざまな度合いが存在するのを見ることができる。すなわち、われわれが椅子-像を見、そして椅子が存在するという場合は、非-妄想的な事例である。われわれが鏡の中を覗いている場合は、部分的に妄想的な事例である、この事例では、われわれが見る椅子-像は、われわれが実在的な椅子と呼んでいる諸存在の粒子的社会が最高点に達することではない。最後にわれわれは麻酔薬を用いているかもしれないので、その時われわれが見る椅子-像は、粒子的社会のいずれの歴史的経路にも緊密な対応物をもっていないのである。(Whitehead, 1978/1929:64, 邦訳94-95頁)

ここでホワイトヘッドは明らかに「度合の差」を主張しており、真正な知覚と錯覚、幻覚が全く別のものであるという選言主義に反対する主張をしている。

それだけではない。次の主張はより極端なものとなる。

また時間の経過が主要な要素であるような別の「妄想的な」場合も存在するのである。これらの事例は、天体についてのわれわれの知覚によって例示される。(Whitehead, 1978/1929:64, 邦訳95頁)

ここで言及されているのは、「時間差論法」(time-lag argument)と称されている問題である。この問題がよりはっきり出るのは、ホワイトヘッドが言うように「天体」である。何光年も離れた天体の知覚は、今知覚したとしても、その知覚像は今の天体のものではない。何年も前のものである。それゆえ今知覚した天体は、今の天体を知覚しているわけではない。即ちわれわれが今知覚していると考えているもの(「今の天体」)と、実際に知覚されているもの(「過去の天体」)との間には「時間差」がある。

これについて選言主義であれば、今天体を知覚することは、天体の真正な知覚ではなく、錯覚、何年も前の天体を今の天体と見なしちゃまっているという形で処理するであろう。

しかしここでこの「錯覚」の原因が光の速度の有限性という、あらゆる光にかかわる知覚—視覚—にかかわるすべての知覚(真正な知覚「かつ」錯覚、幻覚)に関わるものであるということが問題となってくる。即ち非常に短い時間であるにせよ、目の前の机についても、厳密には同時的な机でなくごくわずかの先の時間の机の像を知覚しているのである。そしてそれは外

物のあらゆる知覚についてそういえる。

選言主義の立場からはおそらくここで「同時的」ということを瞬時的に完全に同時刻というのではなく、ある程度の時間の幅をもった「現在」という形で問題を処理しようとするであろう。即ち机についての真正な知覚、今の机の知覚は今ある机についてのものである、という時の「今」はごくわずかな先の時間であれば、「今」の中に入れてしまうのである。無論その場合、何年も前といった天体については「今」の中に入らない以上、それは真正な知覚とはならない。

もっともそういった「今」の幅がどれくらいなのかといった疑問は生じるかもしれない。しかしホワイトヘッドの場合そういった解決法は取らない。彼にとってはあらゆる現在の知覚は、過去の事物についての知覚なのである。その点で彼は時間差論法を厳格にとる。即ち全ての「今」の知覚は「過去の事物」の知覚であって、「今の事物」の知覚ではない。その限りで全ての知覚は、彼の言い方では多かれ少なかれ「妄想」ということになる。

これはある意味でセンス・データ説を挟んで選言説の対極にあるというべき考え方である。真正な知覚と錯覚、幻覚に共通なセンス・データがあるというセンス・データ説に対して選言説は、共通部分はなく、真正な知覚「または」錯覚、幻覚をなしていると主張した。一方ホワイトヘッドは真正な知覚といえども、時間差論法によれば厳密に言えば、何光年も先にある天体と程度の差があれ同じ「錯覚」であり、それゆえ真正な知覚「かつ」錯覚、幻覚もすべては「妄想」として度合の差があるだけである、とする。

1-3. ホワイトヘッドにおける直接知覚

しかし先に生態学的知覚論との比較で述べたように、ホワイトヘッドには直接知覚「も」ある。それが「因果的効果の様態」(the mode of causal efficacy)の知覚である。

因果的効果の様態においては、知覚者(percipient)にとっても現在化された場所(presented locus)における関連する出来事にとっても先行する、因果的に効力のある現実的生起(actual occasion)についての直接知覚が存在する。(Whitehead, 1978/1929:169, 邦訳250頁)

この引用についていくつかの説明が必要であろう。

ここではまず「現実的生起」についての直接知覚が主張されている。「現実的生起」とは「現実的存在」(actual entity)とも言われるホワイトヘッドにとっての世界がそれから構成される究極的要素である。それは「生起」と言われているように、「モノ」ではなく「コト」である。より正確には何らかの生成であり「経験の活動」(act of experience)と言われる⁵⁾。知覚それ自身も、われわれの何らかの生成する活動であって「モノ」ではない。したがって「現実的生

起の直接知覚」とは何か「モノ」を取り入れるというよりも、生成する「コト」である知覚対象に生成する活動である知覚が関係してその活動の一部とするものである。それは生成する活動同士の関係と言える。

そしてこれら活動同士の関係は因果的なものである。即ち知覚物である現実的生起が知覚を引き起こす、即ち現実的生起が原因となって知覚が結果となる。それゆえ知覚物たる現実的生起は「因果的に効力のある」ものとなる。

また「現在化された場所」とは、知覚が「今」の活動としてあるその「今」という場所である。その場所において知覚という活動が生成する。この「今」という場所には知覚だけがあるのではない、他の同時的な活動（思考、聴覚像、身体感覚等々）が共在するから「関連する出来事」が問題になる。

そして知覚される対象—現実的生起はそういった「今」に先行する、「過去」のものである。このことは先の時間差論法を巡る議論において示された。ここで重要なのはあらゆる知覚において、その対象はすべて「先行する」過去の事物であるということである。

ただしここまで「現実的生起」と称してきた「過去の事物」、即ち知覚される外界の生成する「コト」がどのようなものであるのかということについて大きな問題がある。即ちそれはわれわれが知覚するままのもの、例えば机を知覚するなら、外界の事物がそのままの「机」であるのか、それとも実際に実在するのは自然科学が想定する原子や分子でしかないのか、ということである。それはある意味で知覚論を超えて、世界についての在り方、存在論にまで踏み込む問題である。

これについては先述の如く直接知覚を主張する生態学的知覚論と選言主義では方針が違う。選言主義がこれについてははっきりと論ずることはないということは先に述べた。そこで主張される「素朴実在論」は実はわれわれが常識的に考える、世界にあるがままに知覚する、逆に言えば知覚しているがままに世界はあるのだ、というものではない。ただ心から独立した対象があり、知覚はそれについてのものであるというだけである。これは知覚の対象が直接的には心にある表象であるという立場や、あるいはその表象が外界の対象を志向しているという立場と区別される。しかし知覚する現象的在り方がそのままの実在ではないという可能性を残し、むしろ実在するものは原子や分子であるといった科学的自然像を暗黙の裡に前提している。

他方生態学的知覚論は机や木といった日常の対象に原子や分子が「入れ子状」になって、両者ともに存在しているという立場である。そしてホワイトヘッドにおける現実的生起、知覚される外物もまた同じ自然観であるというのが本稿のホワイトヘッドのコスモロジーについての解釈であり、これについては既に別の所で論じた⁶⁾。ただ本稿ではその解釈を、直接知覚、因果的效果についてのホワイトヘッドの議論から改めて裏付けてみよう。

2. 因果的効果

2-1. 因果的効果の対象

ギブソンの生態学的知覚論における入れ子状の自然とは例えばこういうものである。

比較的小さな単位は大きな単位の中に埋め込まれており、それを私は入れ子（nesting）と名付けよう。例えば、峡谷は山に組み込まれ、樹木は峡谷に、木の葉は樹木に、そして細胞は木の葉の入れ子となっている。…ある事物は他の事物の構成部分である。これらは階層を成していると考えられるが、この階層は絶対的なものではなく、段階の推移や部分的重複がしばしばみられる。（Gibson, 1979:5, 邦訳9頁）。

ただしここで日常的なマクロな対象のみを述べているが、それは知覚の対象について論じているからであって、心理学者としてギブソンは当然生理学的な対象や自然科学の対象である原子や分子といったものも当然認めている。ただし、それらは知覚の対象とはなりえない。

一方ホワイトヘッドの直接知覚たる因果的効果はどうであろう。ホワイトヘッドは言う。

暗闇で電光が突然照らされる。人の目が瞬きする。この些細な出来事について簡単な生理学上の説明がある。

しかしその生理学的説明は、全面的に因果的効果の言葉でつづられている。それは、興奮の痙攣が神経に沿って結節ある中枢へと向かう進行と、収縮の痙攣が瞬に帰っていく道程についての推定上の記録なのである。（Whitehead, 1978/1929:174, 邦訳258頁）

ここでホワイトヘッドは因果的効果という直接知覚について、生理学的説明をその一例としている。これは知覚論についてはあくまでも動物と環境という生態学的レベルに留めようとするギブソンと対照的である。ギブソンの場合は視神経への刺激等のミクロなレベルではなく、構造的なマクロな情報こそが知覚の対象であった。

それはホワイトヘッドの知覚論がコスモロジーとして、知覚論だけでなく、人間のあらゆる経験－科学的探究をも包含しうる図式の一部であるということによる。即ちホワイトヘッドは自らの図式を、普通にいう知覚論だけでなく、生理学や物理学理論もその一例として説明できるようなものであろうとしたのである。その限りで科学や生理学の対象もまた「現実的生起」として、知覚と同じ図式で説明されねばならないし、逆に言えば原子や分子、生理学的事象も「知覚」の対象たりうる。

しかしホワイトヘッドの通常の解釈では、そういった原子や分子といったミクロな対象のみ

を「現実的生起」であるとする⁷⁾。日常的な机や木といったものは、科学においてそれらが原子や分子の集まりとされるのと同じく、現実的生起の集まりである「結合体」(nexus)や「社会」(society)であるとされる。確かに科学を問題にする限りでは、日常的な対象をそのように取り扱うのは当然であろうし、ホワイトヘッド自身のテキストにもそのような部分がある。

しかしそれでは同じ因果的效果について次のように言われるのはどうであろうか。

有機体の哲学によれば、その人はまた、因果的效果の様態における知覚も経験している。その人は閃光に関しての眼の諸経験がまばたきの原因だと感じている。…。事実、彼に閃光の優先性を識別できるようにさせるものは、この因果性の感受なのである。…その人は「閃光が私にまばたきさせた」と言って、自分の経験を説明するであろう。(Whitehead, 1978/1929:175, 邦訳259頁)

ここでは閃光を直接知覚するとともに、まばたきをするという経験が因果的效果として述べられている。何よりも「閃光がまばたきさせた」という時の閃光も瞬きも生理学的事象ではなく現象的な、われわれが「心で」経験する事象である。即ちホワイトヘッドは直接知覚として、科学的事象も現象的事象の双方を考えている。さらに知覚という場面を離れた、現実的生起それ自身についても日常的对象を現実的生起とする事例はそのテキストに多々認められる⁸⁾。

2-2. 知覚の活動としての因果的效果

先に述べたように、知覚の対象は生起する活動としての現実的生起である。即ち「机」という「モノ」があってそれを知覚するのではなく、「机がある」という生起する活動が、「机を知覚する」という知覚という活動を引き起こす。

その場合、両者の活動は隣接している、と見なすべきであろうか？しかしここで知覚される活動が、知覚する活動の「現実世界」の内にあるというホワイトヘッドの主張が効いてくる。特にホワイトヘッド自身は複数の活動同士の関係において、包含関係を前提とした媒介する活動を通した何重もの関係を主張する。もしそれらの活動同士が隣接しているだけであるなら、そういった関係の多重性は主張できないであろう⁹⁾。

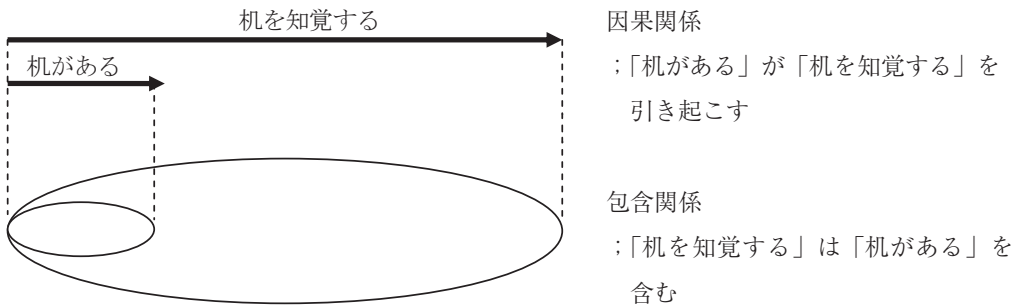
特にホワイトヘッドは身体経験を重視する。即ち因果的效果の直接知覚において、同時に「目が机をみる」「手が触れる」ということの重要性を強調する¹⁰⁾。もしも「机がある」「目が机を見る」「机を見る」が隣接しているだけであるなら、「机を見る」は、直接には「目が机を見る」との関係しか持ちえず、机を「直接」見ることの主張はできない。

知覚の対象と知覚が隣接しているのではなく、知覚が知覚の対象を包含しているという包含関係は、活動同士の関係を重ね合わせの可能性から生じる。モノ同士であれば不可入性から重ね

合されることはありえない。モノ（知覚対象）と活動（知覚）であるならば、モノに隣接して活動が引き起こされることはあっても、やはり重ね合わせはありえない。しかし両者が活動であるがゆえに因果的には原因－結果の関係であっても時空的には重ね合わせることが可能であり、それゆえ両者に包含関係が成り立つ¹¹⁾。

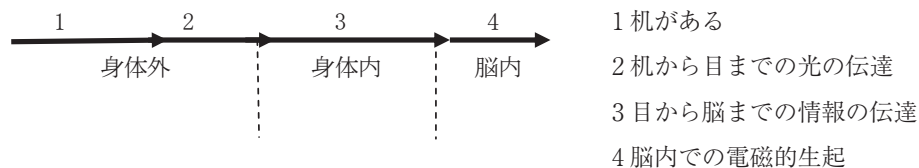
例えば「机を知覚する」という知覚は、「机がある」という対象－活動が原因となって「机を知覚する」という活動が生じたと見なせる。その場合「机を知覚する」という活動が「机がある」という活動の結果でありながら同時にそれを含むということが可能である。これがホワイトヘッドの言う机の直接知覚に他ならない（図1）。

図1



このような系列は生理学的関係においても考えられる。ただし科学的自然像においては、因果関係は隣接した原因との関係のみによって生じると見なされることが多い。そして複数の活動の重ね合わせは、隣接関係による諸活動の別の系列も可能にする（図2）。

図2



そして図1の日常的、現象的な知覚と図2の生理学的な知覚の因果系列もまた、活動同士の関係として重ね合わせることができる。ここにはミクロな科学的、生理学的対象と現象的、日常的对象の双方の両立が可能となる。あるいはギブソン風に言えば入れ子状になっている。

これらの図式にはいくつかの説明が必要であろう。まず図1における知覚対象から知覚を引き起こすことの可能性である。図2の系列は物的な生起同士の関係であるから問題はない。し

かし図2の知覚対象は物的であるのに対して、それによって引き起こされる知覚は心的である。物的な生起が心的な生起をどのようにして引き起こすのか、という心身問題はデカルト以来の重大な問題であった。

これに対してホワイトヘッドは「個々の現実態〔現実的生起〕は、本質的に物的および心的という双極的（dipolar）である」（Whitehead, 1978/1929:108, 邦訳160頁）とする。即ちどのような物的な生起もごくわずかであれ何らかの「心性」（mentality）を持つとホワイトヘッドは主張する。一方心的な生起、例えばわれわれが「人間経験」と呼ぶものもそういった物的なものと同様直接関係を結ぶことができる限り何らかの意味で物的なのである。これは全てが程度の差はあれ何らかの意味で「経験」と見なせるという汎経験論（panexperientialism）、あるいは汎心論（panpsychism）というべき立場である。われわれはこれを自明のものとして無条件に認めることはできないかもしれない。あるいはバークレー的観念論ではないか、という批判も可能である。しかし逆にこの汎心論にこそホワイトヘッドのコスモロジーの意義を見出すことができるかもしれない¹²⁾。ただこの問題についてはここではこれ以上議論する紙数はない。

もう一つホワイトヘッドの知覚において重要なことは、何か主体（subject）が対象（object）を知覚するという図式に拠っていないということである。むしろそういった意味での経験の「主体」はホワイトヘッドには存在しない。彼が「主体」を主張する時、それは客体から生成する活動そのものであって、主体「が」客体に対して何か活動するのではない。即ち知覚の活動それ自身が主体なのである。

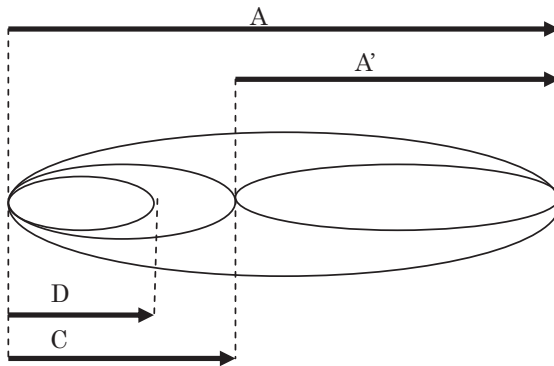
さらに彼は「経験の客主構造」（object-subject structure of experience）といい、主体に対する客体の優先性を主張する。これは主体－活動が客体によって引き起こされ、客体から生成するという状況を示している。それは現在の過去への順応（conformation）という言い方にもなる。ここでの現在とは「現在の経験の活動」であり「過去」とはそういった経験の対象である。そしてそういった過去の対象に対する主体とは、そういった対象から生成する活動、知覚そのものといってもよい。即ち過去－環境の側に主導権があるのであり、その限りでホワイトヘッドのコスモロジーには、情報が全て環境の側にあって知覚はそれをピックアップするだけだとする生態学的知覚論に通じる部分がある¹³⁾。

さらに図2と図1の重ね合わせから、「机を知覚する」という知覚の活動がどこまで広がっているのかということについての重要な示唆がある。知覚などの経験の活動、それゆえそういった活動を担う心が脳内にとどまるかどうかということが、現代の心の哲学における重要な問題であった。ホワイトヘッドの通常の解釈では図2しか認めないため、心が脳内の生起でしかないということが帰結することになった。確かにホワイトヘッドのテキストにおいてもそれを示唆するような箇所がある¹⁴⁾。しかしわれわれの解釈では図2を認める限りそういった脳内の生起としての心を認めつつ、そういった脳内の生起と重ね合わさる形で、図1から脳どころか身

体を超えて経験の活動が、それゆえ心が広がっていることになる。これはギブソンの生態学的知覚論がもたらす帰結と一致する¹⁵⁾。

2-3. 外界からの因果的効果と身体経験 (bodily experience) としての因果的効果

図 3



A ; 机を見る

A' ; 机を感知した眼を知覚する = 身体経験

C ; 眼が机を感知する

D ; 机がある

しかしながら、こういったホワイトヘッドの直接知覚は、直接知覚において通常主張されるような「透明性」(transparency)は存在しない。透明性とは、知覚される外的対象と知覚者の間があたかも透明であるかのように直接外的対象を明晰に知覚することである。

先に述べたようにホワイトヘッドの因果的効果は重ね合わされた多重的活動として、外的対象の直接知覚だけでなく、「身体器官の対象の感知」「情報が伝達される神経の活動」等々が重ね合わされている。従って外的対象の直接知覚だけが存在しているかに見える透明性はない。

むしろ外的対象の直接知覚より、そういった対象に対する身体器官の感知を知覚者が経験することが、より直接的で近接して、よりはっきりしている。それが身体経験である(図3)。実際ホワイトヘッドは「身体経験は、因果的効果の様態においては、空間的限定の比較上の正確さによって特徴づけられる」(Whitehead, 1978/1929:176, 邦訳261頁)と言う。

他方外的対象の直接知覚としての因果的効果は、もろもろの活動が重なり合っているがゆえに不鮮明で曖昧である。それは身体の効果为重なるがゆえに情動的である。そういった外的事物からの因果的効果について、例えば次のような記述がある。

日常の感覚与件を抑止するということは、因果的に働く周囲の世界に関する漠とした恐怖のとりこにさせがちである。暗闇の中には、いかがわしく恐ろしいぼんやりとした霊がいる。静寂の中では、自然の抗しがたい因果的効果がわれわれにひしひしと迫ってくる。八月の森林では昆虫の低いぶんぶんいう音の漠然さの中で、われわれを包んでいる自然からいろいろな感じがわれわれの中へ入ってきて圧倒する。仮眠のぼんやりした意識の中で感覚の現前が薄れていき、われわれには周囲の漠とした諸事物からの漠然とした働きかけの感じ

しか残らない。(Whitehead, 1978/1929:176, 邦訳260頁)

3. ホワイトヘッドにおける表象

3-1. 現前的直接態 (presentational immediacy)

このように曖昧であるにもかかわらず、知覚において直接知覚—因果的效果を見出したということは、ホワイトヘッドの知覚論においては重要な意義を持つ。先にわれわれはホワイトヘッドの錯覚論法たる「妄想」についての議論が時間差論法を含み、全ての知覚が程度の差さえあれ何らかの「妄想」にしかならないことを見た。もし直接知覚が存在しなければ、過去の事物を現在の事物として知覚するだけであり、それゆえ世界についての懐疑論から抜け出る道を見失うことになったであろう。

さらに因果的效果は因果性を直接知覚することにもなる。ホワイトヘッドはヒュームを、印象とその弱まった形である観念しか問題にできず、それゆえ因果性を見失ったと批判する。ヒュームは印象の反復によって、形成された習慣としか因果性をとらえられなかった。しかしむしろわれわれは因果性を直接知覚しているのだ、とホワイトヘッドは主張する。因果的效果においては、原因である事象（知覚の場合は「机がある」という知覚の対象）そのものが、結果である事象（知覚の場合は「知覚する」という活動）に包含される（図1参照）。即ち結果に原因が含まれ、その含まれた原因が結果の内部から結果を引き起こすのであるから、結果の側から因果性を直接見出すことができるのは自明のこととなる。それはまさにわれわれが、現在の経験において記憶が直接的に経験されている、推測などによらないのと同じことである。

しかし錯覚論法によって全ての知覚に共通な心の内的対象としてのセンス・データが導かれたように、幻覚論法を認める以上、ホワイトヘッドにもそういった心の内の存在を対象とする知覚がある。それが因果的效果の様態の知覚と並ぶ、現前的直接態の様態の知覚である。

錯覚論法から導き出される知覚の対象がセンス・データであるのに対応して、「妄想」論法から導き出される知覚の対象をホワイトヘッドは「感知与件」(sensum)と称する。そしてこれはホワイトヘッドが「永遠的客体」(eternal object)と称するものの一種となる。永遠的客体とは、歴史的に普遍と言われてきたものをホワイトヘッドが再規定したものである。さらに現実的生起が「心的 (mental)」と言われるのは、永遠的客体を何らかの経験の活動の対象とする限りにおいてであり、それは「物的」と言われるのが現実的生起を経験の活動の対象とするのに対比される。その限りで感知与件の「心的」性質は、センス・データが物理的対象と区別された心的な対象とされるのに対応する。

しかしここでこの「感知与件」が心によって生み出されたものではないということは重要である。むしろ全ての生起が物的でありかつ心的であったことから明らかなように、それは外界

の事物に内在する「普遍」なのであって、心が作り出したクオリアに類するものではない。むしろ因果的効果の対象にも内在しているのであり、現前的直接態は因果的効果の対象に内在する感知与件を引き継いでいるだけなのである。

ただし、この感知与件は外界にあるがままに受け入れられるのではない。むしろ身体によって内的に投射される。ホワイトヘッドは言う。

さまざまな身体の部分の経験は、「投影された」感覚与件の根拠 (reason) としてそれら諸部分を原初的に知覚することである。手は投影された触覚与件の根拠であり、眼は投影された視覚与件の根拠である。われわれの身体経験は、原初的には現前的直接態が因果的効果に依存していることの経験なのである。(Whitehead, 1978/1929:176, 邦訳260-261頁)

ここで因果的効果の中では比較的判明であった身体経験が現前的直接態を引き起こすことに重要な役割を果たしていることに注意すべきである。そして現前的直接態ではそういった投射された感知与件を知覚の対象としている。その限りで現前的直接態は、外界に直接かわるのではなく身体経験—内的な経験を根拠とするものである。

このように感知与件は外界を起源としても、それ自身は外界に直接かわるものではない。しかし一方で、外界に対する経験によって引き起こされた経験、即ち外界の対象を感知した身体の経験から生じたという点で、外界の対象との間接的な関係を持っている。このように外界に関わる内的対象という点で、われわれは現前的直接態の対象である感知与件を「表象」と呼んでもよい。

また現前的直接態の身体性への依存は、「その身体における幾何学的歪みのある状態及びその身体の細胞におけるある質的で生理学的な興奮が、現前的直接態の全過程を統御している」(Whitehead, 1978/1929:126, 邦訳188頁)。しかし次のように言われる。

現前的直接態の様態は、比較的高度の有機体にのみ属するように、一層後期の過程の段階の一層洗練された活動性を必要としている。われわれが判断しうる限り、そのような高度の有機体は、われわれの直接の環境における有機体の総数と比べれば、比較的少数である。(Whitehead, 1978/1929:172, 邦訳255頁)

それゆえここでの身体は脳などの中枢神経系を含む高度な生物にのみ限られると考えた方がよいであろう。実際表象をもつのは高度な生物に限られる。

3-2. 表象の意義と象徴的指示 (symbolic reference)

現前的直接態は内的であるが、曖昧な因果的效果に対して明晰である。実際それは内的であるがゆえに、われわれにとって直接的であり、諸々の活動の重なり合いがなく感知与件のみを対象としている。それゆえそれはその対象である感知与件に対して透明である。

さらにそれは現在の知覚として現在の対象を知覚する。「現前的直接態は、それ自身により限定されるものとしての直接的現在についてのみ積極的情報を与えられるからである。現前的直接態は、感覚という手段によって、世界の〔現在という〕横断面の内部での可能的細分化を図示する」(Whitehead, 1978/1929:124, 邦訳184頁)。因果的效果は過去の事物しか知覚の対象にできないが、われわれは現在を生きているのであり、現在の活動のための知覚が必要である。

もっとも時間差論法と言えども、身近にある対象では時間的ずれは無視してよいほどしかでないし、その限りで因果的效果による知覚はある程度までは「現在」の知覚と見なしてよいかもしれない。実際現前的直接態を持たない低度の有機体も、本能的行動等では因果的效果の知覚にのみに基づいて行動している。

しかし現実の生活の利便のためにわれわれは、隣接する手近な対象だけでなく遠くの対象もすべて見通してそれらを操作したい。さらに遠方の星と言えども「現在の星」と知覚した上で現在の生活に利用する（例えば航海に利用する）ことも可能でなければならない。

そういった操作の対象として表象は非常に有用であるし、現在の知覚の重要性という点からも、現前的直接態にも重要な意義がある。問題はそれが直接世界とつながっているのではなく、また妄想論法にあるように錯覚、幻覚と真正な知覚とに本質的な違いがないということである。

ここに因果的效果と現前的直接態をつなぐ必要がある。それが象徴的指示である。ある因果的效果の知覚とある現前的直接態の知覚との間に象徴的指示が成立するためには、二つの共通要素が必要であるとされる¹⁶⁾。それは両者に共通の感知与件と、現在化された場所 (presented locus) である。感知与件については先に述べたように、元々外的対象に内在する「普遍」が因果的效果において対象と共に取り入れられるとともに、そこで対象から抽象される。そのように抽象された感知与件を、現前的直接態において投射される。その感知与件が投射されるのが現在化された場所、「現在」という空間なのである。因果的效果はその対象は過去の事物であるが因果的效果の活動それ自体は「現在」生成しているものである。それゆえ現在化された場所は現前的直接態と因果的效果の双方に共通なものとしてある。

この二つの共通要素を前提として、象徴的指示は因果的效果の諸対象を、現前的直接態の対象—感知与件に関連付ける。例えば因果的效果の対象である「過去の机」を現前的直接態によって投影された「机」という感知与件に関連付ける。そしてこの投影された感知与件は元々「過去の机」に内在した普遍、あるいは形相であり、それが因果的效果において物的対象としての「過去の机」から抽象されて、現前的直接態に引き継がれたのである。さらに感知与件が

投影された空間は、「現在」として因果的効果もその内にある。即ち象徴的指示は、因果的効果が活動しているのと同様の空間に、因果的効果が知覚した過去の機の感知と件を、因果的効果にとっての「現在の機」として関連付けたのである。

その場合、因果的効果の知覚と現時的直接態の知覚との間に真理の対応説といったものが成立するかもしれない。即ち現実存在する外界の対象にある表象が関連付けられればそれは真であり、そうでなければ偽であるといった風なのである。その場合、対応させるのが物的な外的対象と心的対象という全く異なったものである場合と違い、経験同士、知覚同士の対応である。それゆえそれらの対応はより容易になるのかもしれない。

しかしそのような対応を考えるならば、象徴的指示には本質的に過誤が含まれることになる。実際そこでは「過去の機」を「現在の機」と表象している。このことは天体においてより顕著となる。「過去の天体」それも何年、何百年も前の天体、場合によっては最早や存在しない天体を「今あそこにある天体」と表象する。

しかしそのように誤った表象であっても、われわれの生活に有用である場合もある。実際天体は、こういった「過誤」の典型的なものであるが、そういった天体の相互配置（現在の真の姿とは異なった誤った像）により、航海などに利用できる。従ってホワイトヘッドは「象徴作用〔象徴的指示を含む〕は正当化されたりされなかったりする。正当化の吟味は常にプラグマティックでなければならない」（Whitehead, 1978/1929:181, 邦訳268頁）と言う。

さらに曖昧で不透明な対象が、明晰な表象に関連付けられることで、他のことに使用するのにプラグマティックに有用であるというだけではなく、その対象の解明に役立つということがあるかもしれない。あるいはそういった表象によって単純化され、あるいは重要な点が強調され些末な点が省略されたことにより、その対象についての経験が深められるということもあるかもしれない。無論表象についての経験が、その源である曖昧だが強力な対象と関わることでより鮮明になるといったこともあろう。それゆえホワイトヘッドは次のように言う。

もし経験のある一定の要素に関する感受が二つの源泉—その一つはこの継承であり、もう一つの源泉は純粋な様態の一つにおける知覚であるような二つの源泉—に基づくとし、それからその二つの源泉からの感受が総合によって強めあうとすれば象徴的指示は正しいのである。しかしもしそれらが食い違って相互に抑圧し合うとすれば、象徴的指示は誤っている。（Whitehead, 1978/1929:181, 邦訳268頁）

終わりに

直接知覚を主張する根底には、世界とのつながりを確保したい、内的な世界に閉じ込められ

たくないという素朴实在論への志向というものが強くあった。それゆえ知覚の直接の対象がセンス・データなど内的な心的対象ではないとした。さらに生態学的知覚論においても、全てを環境の側に置くといったことに、世界への志向というものが出たかに思われる。

しかしそれは一方で内的対象としての表象を放棄するという傾向をもたらした。生態学的知覚論の場合ははっきりとそう主張する。選言説の場合そこで主張される「素朴实在論」が必ずしも現れのままに外物が存在するということを含意していないため、場合によっては何らかの媒介物が想定される可能性もあるが、大体の傾向はその方向であろう。

しかし表象はわれわれを内的世界に閉じ込めるというだけでなく、むしろ操作の対象としてわれわれの生活に有用であるという側面がある。内的対象として操作しやすく、状況に対するシミュレーションを可能にする。そういったことがわれわれの生活や科学の可能性を広げるのである。その限りで表象はやはり保持されるべきであろう。

ホワイトヘッドの特徴はこういった直接知覚と表象を両立させようとしたことにある。それは因果的效果と現前的直接態という二重の知覚の様態を主張することによってであった。

従来のホワイトヘッド研究においては、因果的效果がそのセンス・データ説批判や、因果性の直接知覚といったことから評価されたにせよ、現前的直接態との二重性の意義が十分理解されなかった。しかし直接知覚論が主張されることで、実は因果的效果の意義はそこにあることが明らかになると共に、現前的直接態については表象の有用性という点から再考する余地があることが明らかになった。もっともホワイトヘッド自身は表象の有用性、特に操作性についてはより一般的に「象徴作用」(symbolism)の問題として論じていたとも言える。

しかしこの知覚の二つの様態共存の在り方が問題である。因果的效果がなされてから、現前的直接態がなされるといった継起的なものではありえない。どちらも「現在化された場所」の内にあるからである。明らかに両者は重ね合わされている。本稿ではそういった重ね合わせを因果的效果の内部にも適用して論じることによって現象的な知覚論と生理学的研究の共存を目指した。

ともあれホワイトヘッドのコスモロジーの意義は、直接知覚も表象も、現象的な知覚論も生理学的研究も全てを含むという包括性にあるのであろう。

注

- 1) その場合、脳内の電磁的生起と心的な出来事である知覚とがどのような関係であるのかということは重要な問題になる。これは「心身問題」として議論されることであるが、現在有力な考え方は、心的な出来事(表象の現前等)は脳の中の生理学的な出来事に「付随する」(supervene)といった考え方である。
- 2) 生態学的知覚論については、Gibson (1950), Gibson (1966), Gibson (1979) を参照。

- 3) 選言主義については、Byrne and Longe (2009) と Haddock and Macpherson (2008) を参照。
- 4) 平田 (2018) を参照。
- 5) Whitehead (1978/1929) p.40 邦訳59頁。
- 6) 平田 (2014) を参照。
- 7) 同上。
- 8) Wallack (1980) を参照。
- 9) Whitehead (1978/1929), p.226、邦訳331-332頁。ホワイトヘッド自身はA、B、C、Dという四つの現実的生起についてDがCを引き起こし、CがBを引き起こし、BがAを引き起こす事例について考察している。そこでAはDについて、1) Dを直接、2) Cという媒体を通して、3) Bという媒体を通しての三重の関係を主張する。もしも隣接する関係であるなら、Bと直接関係するだけでDとは全く関係しないであろう。ただここでは単純化のために、D「机がある」とA「机を知覚する」の関係のみを考える。無論必要であればC「眼が机を感知する」、B「神経系統が机の視覚像を伝達する」というものを考えても良い。これについて詳しい議論は平田 (2016) を参照。
- 10) Whitehead (1978/1929), p.173、邦訳256頁。
- 11) こういった活動の重ね合わせや包含関係については、Goldman (1970) における複数の行為を同時に為すといった考え方が参考になる。即ちゴールドマンは、通常の一つの行為に複数の記述という考え方を取らず、例えば「引き金を引く」と「ジョンを撃ち殺す」の事例のように、複数の行為を同時に為し、しかもそれらは「によって関係」(by relation) (「引き金を引く」ことによって「ジョンを撃ち殺す」) によって因果性に類似の (ゴールドマン自身は因果関係であることは否定する) 関係 (「引き金を引く」ことが「ジョンを撃ち殺す」ことを「引き起こす」) によって結び付けられる。しかも「ジョンを撃ち殺す」時空範囲に「引き金を引く」という時空が含まれているように、それらは時空的には包含関係にある。これについての詳しい議論は平田 (2014) において既に論じている。
- 12) そういった議論の一端については平田 (2014) を参照。
- 13) このような生態学的知覚論とホワイトヘッドの知覚論の近縁性は、生態学的知覚論において有名な「アフォーダンス」(affordance) を巡っても見出すことができる。
アフォーダンスについてギブソンは次のように規定する。

環境のアフォーダンスとは、環境が動物に提供する (offer) もの、良いものであれ悪いものであれ、用意したり備えたりする (provide or furnish) するものである。…

もしも陸地の表面がほぼ水平 (傾斜しておらず) で、平坦 (凹凸がなく) で、十分な広がり (動物の大きさ) をもっていて、その材質が硬い (動物の体重に比して) ならば、その表面は支えることをアフォードする。(Gibson, 1979:119, 邦訳137頁)

このアフォーダンスは直接知覚において重要な意義を持つ。なぜなら環境においてそれは動物 (知覚者) が何をするのかということを規定するからであり、それゆえ動物がどの情報を得るのかとい

うことを規定するのである。そして動物は環境によって情報を与えられている、即ち動物は直接構造化された情報を知覚することになる。

ホワイトヘッドにとっては、知覚者が主体的形式 (subjective form) を直接知覚するということだが、このことに関して重要な意味を持つてくる。主体的形式とは、知覚者がどのように与件を経験するのかということを規定する。もし知覚者が主体的形式を作り出さず、対象から主体的形式を受け取るとするなら、客体の主体的形式は経験の仕方をアフォードすることになる。そしてホワイトヘッドは言う。

直接的な過去の生起の主体的形式は現在のそれと連続している。…

…過去の生起によって享受された感受は、新しい世紀の直接性における与件として現前しており、主体的形式はその与件の感受の主体的形式に順応して (conform) いる。(Whitehead, 1967/1933 : 183)

この主体的形式の順応が、知覚者の側からは、対象からの構造化された情報の直接知覚に他ならない。すなわち「どのように経験するか」をも対象の側から規定するということであり、これはまさにアフォードランスにあたる。

14) 例えば次のような記述がある。「この統括的生起 (presiding occasion) の経路は、おそらく物的な物質的原子から分離した脳髓の部分から部分へと遊走する」(Whitehead, 1978/1929:109, 邦訳162頁)。ここでの統括的生起とは身体全体を統括するということであるから、確かにこの限りでホワイトヘッドにとっての心、人格は脳髓の中にあると見なせる。しかしそれと共に、身体を広がる心も重ね合わせて共にある。それはわれわれが行為をするとき、その範囲が身体運動に限られず、道具等を通してより広がっているのと同じであろう。

15) 生態学的知覚論で心が身体を超えて広がるということについては、河野 (2005) を参照。

16) Whitehead (1985/1927) p.78, 邦訳157頁。

17) Whitehead (1985/1927) p.49, 邦訳134頁。

参考文献

Byrne, A. and Logue, H. (ed.) (2009) *Disjunctivism: Contemporary Readings*, MIT Press

Gibson, J.J. (1950) *The Perception of the Visual World*, Boston: Houghton-Mifflin. 東山篤規他(訳)『視覚ワールドの知覚』2011、新耀社。

— (1966) *The Senses Considered as Perceptual Systems*, Houghton-Mifflin 佐々木正人他(訳)『生態学的知覚システム』2011、東京大学出版会。

— (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*, Houghton-Mifflin. 古崎敬他(訳)『生態学的視

覚論』1985、サイエンス社。

Goldman, A. I. (1970) *A Theory of Human Action*, Princeton University Press.

Haddock, A. and Macpherson F. (ed.) (2008) *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*, Oxford University Press.

Wallack, F.B. (1980) *The Epochal Nature of Process in Whitehead's Metaphysics*, Albany: State University of New York Press.

Whitehead, A.N. (1985/1927) *Symbolism, Its Meaning and Effect*, Fordham University Press. 藤川吉美他(訳)、『理性の機能・象徴作用』[ホワイトヘッド著作集第八巻] 1981, 松籟社。

— (1978/1929) *Process and Reality*, Corrected edition, The Free Press.

平林康之(訳)、『過程と実在』1、1981, 2, 1983, みすず書房。

— (1967/1933) *Adventures of Ideas*, The Free Press. 山本誠作他(訳)、『観念の冒険』[ホワイトヘッド著作集第12巻] 1982, 松籟社。

河野哲也 (2005) 『環境に拡がる心—生態学的哲学の展望』 勁草書房。

平田一郎 (2014) 「汎主体主義の可能性」『理想』 No.693、理想社、pp.31-42。

— (2016) 「ホワイトヘッドのコスモロジーにおける『行為』の遍在性について」『研究論集』 第103号、関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部、pp.1-21。

— (2018) 「ホワイトヘッドの知覚論と生態学的知覚論」『研究論集』 第108号、関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部、pp.1-19。

(ひらた・いちろう 短期大学部准教授)